

「一番星」を活用した早場米産地の育成

鹿行農林事務所行方地域農業改良普及センター

行方地域は県内有数の早場米地帯であり、潮来市大規模稲作研究会では、品種育成時より「一番星」の特性に注目し、平成21年から「ひたち29号」(のちの「一番星」)の現地試験に取り組んできました。普及センターでは、潮来市大規模稲作研究会、潮来市やJAなめがた等の関係機関と連携し、産地の“希望の星”となるよう生産振興や販路拡大を図っています。

潮来市における「一番星」の導入

「一番星」は平成27年より一般栽培が開始されましたが、潮来市大規模稲作研究会では、一般栽培に先駆け、県と許諾契約を結び種子を生産し、平成25年から「一番星」として生産・検査・出荷を行ってきました。行方地域の「一番星」の栽培面積は、20.4ha(H25)→25.3ha(H26)→28.7ha(H27)と着実に増加しています。



中干し期の現地検討会の様子



種子生産圃場での異株抜きの様子

特色ある「一番星」の生産

平成26年からは、特別栽培米の生産を始めました。「一番星」で、有機質肥料や堆肥を利用するのは初の試みでしたが、育苗期、中干し期、追肥期に現地検討会を開催し、栽培管理の徹底を図りました。平成26・27年の生育期間は、高温・多照でしたが、大粒で白未熟粒の発生もなく、実需者の評価も良好でした。

産地の顔となる品種に向けて

「一番星」は、4月中旬の田植えや8月上旬の収穫がメディアに取り上げられており、早場米産地のPRに一役買っています。市場での知名度はまだですが、都内の米穀店からは早場米として好評価を得ています。また、平成27年からは、商工会や地元の酒造メーカーとの商品開発も進められており、関係機関と連携して様々な取り組みを支援していきます。



初田植え(左 H27. 4月14日)および初収穫(右 H27. 8月5日)の様子